

「掣風掣顛」蠡測

加藤 一 寧

はじめに

「掣風掣顛」は『臨濟録』勘弁の一段（以下「本条」）に見られ、普化の人となりを表す語として「風顛」「風狂」とともに知られている。¹ その語義は『禪学大辞典』（大修館書店、一九七八、以下「禪学」）六四九頁に「風顛を掣する。常規を逸した、気狂いざたを演ずること」とあり、入矢義高監修・古賀英彦編著『禪語辞典』（思文閣出版、一九九一、以下「禪語」）二五二頁に「気ちがいじみたことをやらかす」とある。また旧解を『臨濟録抄書集成』（中文出版社、一九八〇）より挙げると「物狂ノヤウ」（七六頁）「風顛漢」（三〇四・四一頁）「風狂風顛」（五六九・一〇六八・一一二七頁）となる。しかし「掣」の字義は不明で『宋語言詞典』（上海教育出版社、一九九七、以下「宋語」）四〇頁「掣風掣顛」に「瘋瘋癲癲、形容言語舉止不合常態。也作（徹風顛）（徹顛徹狂）」とあって、はじめて「掣」は「徹」に同じと理解された。ただ「掣風掣顛」から「掣風顛」へ変形し、「徹」を代入すると「徹風顛」（風顛に徹す）となるが、『宋語』の語釈とは瘋癲の程度に違いがあるように思われる。また「宋語」が示す「徹風顛」「徹顛徹狂」の用例は、道元の師如浄（一一六二～一二二七）と大慧宗杲の法嗣橘洲宝曇（一一二九～一一九七）の

ものしか見つけることができなかつた。

そもそも『臨濟録』は唐代の禪の究明のためにも用いられるが、衣川賢次「臨濟録札記」(『禪文化研究所紀要』一五、一九八八)によると、後代の改変を受け言語資料として確かなものではない。^②「掣風掣顛」の語も『祖堂集』には見えず、^③「景德伝灯録」「天聖広灯録」に見えるので、改変の一つと想定される。また「掣」「徹」は「広韻」入声薛韻に属するが、同音ではなく、辞書類にもその通用は確認できない。「掣風掣顛」は唯一「掣」が「徹」と通用される用例なのであろうか。^④

本稿では第一に如浄・橘洲の用例の他に、普化の人となりを表す「風顛」「風狂」が「徹」と共に使用される用例を、中国史料に一例・日本史料に二例見出して、一例を除きすべて南宋に相当する時期のものであることを確認する。第二に反対に「徹」が「掣」の意味で使用される例を挙げ、宋僧の間では「掣」「徹」が互用されていた可能性を示す。第三に後掲の如く、日本人僧が「徹風徹顛」の語を用いるが、旧解は「掣」「徹」の通用に言及しない。そこで旧解の変遷をたどり、その原因を推測する。第四に「本条」は改変の過程で「掣風掣顛」の語が入りこみ、唐代の禪ではなく宋代の禪を表す一段となったと考え、宋僧の理解により解釈を試みる。尚、唐宋の禪については、小川隆『続・語録のことは「碧巖録」と宋代の禪」(『禪文化研究所』二〇一〇、以下「続・語録」)が簡要に記すが、「本条」は同書で示される「文字禪」の範疇に分類し得る話頭と考える。^⑤

一、「徹」・「風顛」「風狂」

1、「掣風掣顛」

まず「掣風掣顛」が用いられる「本条」(入矢義高訳注『臨濟録』岩波文庫、一九八九、一五五〜七頁、以下「文庫」・柳田聖山訳『臨濟録』中公クラシックス、二〇〇四、四〇〜一頁、以下「中公」。本文は「文庫」より引用)を掲げる。

師一日、與河陽木塔長老、同在僧堂地爐内坐。因説、普化毎日街市、^①掣風掣顛。^②知他是凡是聖。言猶未了、普化入來。師便問、汝是凡是聖。普化云、汝且道、我是凡是聖。師便喝。普化以手指云、河陽新婦子、木塔老婆禪。臨濟小厮兒、卻具一隻眼。師云、這賊。普化云賊賊、便出去。

《訓読》

師一日、河陽木塔長老と同一僧堂の地炉の内に在って坐す。因みに説う「普化毎日街市に在って風に掣し顛に掣す。知んぬ、他は是れ凡か是れ聖か」。言猶お未だ了らざるに、普化入り來たる。師便ち問う「汝は是れ凡か是れ聖か」。普化云く「汝且く道え、我は是れ凡か是れ聖か」。師便ち喝す。普化手を以て指さして云く「河陽は新婦子、木塔は老婆禪、臨濟は小厮兒、却って一隻眼を具す」。師云く「這の賊」。普化「賊賊」と云って、便ち出で去る。

《訳》

ある日、師は河陽・木塔長老と僧堂の囲炉裏を囲んでいたが、そのうちの一人が話のついでに言った。「普化は毎日町で瘋癲のしほうだい。やつは凡夫か聖人か、分らないな」。言い終わらない内に、普化が入ってきたので、師はすかさず問うた。「おまえは凡夫か聖人か」。普化が言った。「おまえが言え、おれは凡夫か聖人か」。師は直ちに一喝した。普化は指さしながら言った。「河陽は花嫁、木塔は老婆。臨濟はこわっぱ、でも見どころがある」。師が「この賊」と言うと、普化は「賊賊」と言って、さっさと出て行ってしまった。

傍線①は「文庫」「中公」ともに「掣風掣顛す」と訓読するが、「掣」は「徹」に通じると考え従わない。傍線②は

「中公」は「知他^{しち}ず」と訓読し「反語」と注記する。「文庫」は「知他^{しち}んや」と反語を明示するが、注には「知他」は疑問ないし反語。「不知」の意にもなる。「他」は助詞」とあり、その説明は明瞭ではない。⁶バートン・ワトソン訳「臨濟録」八六頁「普化が凡夫か聖人か、見分けがつかない」(I can't tell whether he's a common mortal or a sage) ⁷がまざる。また「本条」「知他」の「他」を助詞と解せないことは衣川前掲「臨濟録札記」二〇頁が明らかにしている。⁸

2、如浄「微風顛」「微顛微狂」

「宋語」は「如浄語録」の用例だけを載せる。訳注に鏡島元隆『天童如浄禅師の研究』（春秋社、一九八三、以下「如浄」）・藤木英雄『凡俗による如浄禅師語録全評釈』（大法輪閣、二〇〇九）がある。「如浄」の校訂文を掲げ訓読する。

【微風顛】

「台州瑞巖寺語録」（「如浄」一九六・七頁）

上堂。

今朝九月初一、打板普請坐禪。

第一切忌瞌睡、直下猛烈爲先。

忽然爆破漆桶、豁如雲散秋天。

劈脊棒、迸胸拳、晝夜方纔不可眠。

虚空消殞更消殞、透過威音未朕前。

咦。

栗棘金圈恣交衰、凱歌高賀微風顛。

《訓読》

上堂。今朝九月初一、打板し普く坐禪を請う。第一に切に瞋睡することを忘め、直下猛烈を先と為せ。忽然と漆桶を爆破せば、豁如として雲、秋天に散らん。劈脊に棒し迸胸に拳して、昼夜、方纒て眠る可からず。虚空消殞し更に消殞し、威音未朕の前に透過せん。咦。栗棘金圈、恣に交衰すれば、凱歌高賀して風顛に徹せよ。

【徹顛徹狂】

〔清涼寺語録〕〔如淨〕一五一〜三頁

提綱。

露柱懷胎、忽然爆裂、

使其變作水牯牛徹顛徹狂。

突出無孔鐵槌、歷劫都盧敗缺。

東撐西拄、南倒北播、

直得、金粟大士、陞玉麟堂、

未免犯太平水草、破清涼田地。

親從毛錐子上吹一陣業風、

……。

《訓読》

提綱。露柱懷胎し、忽然と爆裂し、無孔の鉄槌を突出し、歴劫都盧敗欠す。直に得たり、金粟大士、玉麟堂に陞り、親しく毛錐子の上従り一陣の業風を吹き、其をして変じて水牯牛と作し、顛に徹し狂に徹せしむ。東に撐え西に拄え、南に倒れ北に播び、未だ免れず、太平の水草を犯し、清涼の田地を破ぶるを。

如淨は南宋の僧だから、ともに南宋の用例となる。

3、「徹風顛」「徹風狂」「徹風顛漢」「徹風徹顛」

【宋語】不採録のものを列举する。

【徹風顛】

橘洲宝曇『大光明藏』上卷、幽州盤山宝積禪師章（統藏一三七、八二三）⁹⁾

師將順世告衆曰「有人邈得吾真否」。衆皆將寫得眞呈師、不契。普化出曰「某甲邈得」。師曰「何不呈似老僧」。普化廻翻筋斗而出。師曰「這漢向後徹風顛爲人去在」。

《訓読》

師將まに順世せんとし、衆に告げて曰く「人有つて吾が真を邈うし得るや」。衆皆みな写し得た真を將もつて師に呈すも、契かなわず。普化出でて曰く「某甲、邈し得」。師曰く「何ぞ老僧に呈ていせざる」。普化廻まち筋斗きんとを翻して出づ。師曰く「這この漢向後風顛に徹して為人いじんし去る在り」。

橘洲も南宋の僧だから、南宋の用例となる。

【徹風狂】

浄符編『宗門拈古彙集』卷一一、盤山宝積章（統藏一一五、六四〇b）

盤山將順世告衆曰「有人邈得吾真否」。衆將所傳頂相呈似、皆不契。時普化出曰「某甲邈得」。盤曰「何不呈似老僧」。化遂翻一筋斗而出。盤曰「者漢向後徹風狂去在」乃奄化。

『宗門拈古彙集』には康熙三年（一六六四）の自序がある。前掲『大光明藏』の「徹風顛」の例をふまえた上で、「徹風狂」と改めたものと推測する。ただこの推測が妥当かどうかが問題である。

【徹風顛漢】

『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』卷二（『大日本仏教全書』一四三、仏書刊行会、一九二二）三五頁¹⁰⁾

六十鳥藤忍不甘、三拳拔本太閻闍。徹風顛漢漢無收殺、恣意人間作白拈。臨濟。「石門」。

《訓読》

六十鳥藤忍んで甘ぜず、三拳本を抜き太だ閻閻(を誑諱)す。風顛に徹する漢收殺する無く、意を人間に恣にして白拈を作す。臨濟。

題名が「臨濟」であるこの偈頌は、日本の義堂周信(一三二五～一三八八)編纂の総集中の用例で中国史料には見えない。石門は石門善来で大川普濟(一一七九～一二五三)の法嗣だから、南宋の僧となり、この例も南宋の例となる。

【徹風徹顛】

『無象和尚語録』下卷(『五山文学新集』六卷、東京大学出版会、一九七二)五九〇頁「佛祖贊・寒拾」に五作品が並ぶ。その一と三を挙げる。

「寒拾」(一)

就嵩磨松煙、捨葉寫何偏。③五峰雙澗畔、兩兩掣風顛。遭它饒舌豐干後、回首五臺眉嶺前。

《訓読》

嵩に就き松煙を磨り、葉を拾って何偏書くや。五峰双澗の畔、兩兩風顛に掣す。它に遭う、饒舌豊干の後、首を回らず、五台眉嶺の前。

《訳》

拾得は寒巖で墨を磨り、寒山は葉を拾って詩をいくつ書くのか。五峰・双澗一帯で、二人とも瘋癲のしほうだい。閻丘胤が二人に遭遇したのは、饒舌な豊干に会った後だが、ふりかえれば、寒山はその前身が五台山の文殊菩薩で、拾得は峨眉山の普賢菩薩であった。

《注》

○嵩＝寒山が住していた寒巖。

○磨松煙ニ松煙は墨。拾得が墨を磨り筆に点じ手渡し、寒山が詩を書く画題がある。「虚堂録」卷六、仏祖讚に「寒山作吟身勢」「拾得磨墨過筆」の二贊があり、「虚堂録耕」(禪文化研究所、一九九〇)七二九頁に「忠曰(亦是與前寒山吟身雙幅圖也。拾得磨墨點筆、過與寒山也)」(亦た是れ前の寒山吟身と双幅図なり。拾得墨を磨し筆に点じ寒山に過与す)とある。

○拾葉ニ「景德伝灯録」卷二七、寒山子章(禪文化研究所本、一九八九)五六二頁に「於林間得葉上所書辭頌及題村墅人家屋壁、共三百餘首」(林間に於いて葉上に書する所の辭頌及び村墅人家の屋壁に題するものを得、共に三百余首)とある。

○偏ニ玉村竹二氏校訂注は「編」とする。

○五峰雙澗ニ国清寺の境地。徐靈府「天台山記」(「古逸叢書」所収)に「(國清)寺有五峯……雙澗迴抱」とある。

○遭它饒舌豊干後ニ閭丘胤は豊干から「寒山が文殊、拾得が普賢」ともらされ、国清寺で二人を礼拝するが、二人は大笑し「豊干は饒舌饒舌」と叫ぶ。「寒山子詩集」閭丘胤序に「胤乃問曰(未審彼地當有何賢、堪爲師仰)。師曰(……寒山文殊、遯迹國清。拾得普賢、状如貧子……)。胤便禮拜、二人連聲喝胤、……叫喚乃云(豊干、饒舌饒舌、彌陀不識、禮我何爲)」(胤乃ち問いて曰く(未審し、彼の地、當に何の賢か、師仰を爲すに堪うべき有るか)。師曰く(……寒山は文殊、国清に遯迹す。拾得は普賢、状は貧子の如し……)。胤便ち禮拜す。二人連聲に胤を喝し……叫喚し乃ち云う(豊干、饒舌饒舌、彌陀識らず、我を礼して何をか為さん)とある。

○五臺ニ山西省の五台山。文殊菩薩の靈場。「仏説文殊師利法寶藏陀羅尼經」(大正二〇、七九一C)が拠の一つ。

○眉嶺ニ四川省の峨眉山。普賢菩薩の靈場。「峨眉山志」卷二「菩薩聖迹」(「中国仏寺史志彙刊」第一輯四五冊、明文書局、一九八〇)一〇六・七頁が拠の一つ。

「寒拾」(三)

◎雙磎底、五峯前。神出鬼沒、徹風徹顛。咄、却被豐干都漏泄、舉止不直半文錢。

《訓読》

双磎の底、五峯の前。神出鬼沒、風に徹し顛に徹す。咄、却つて豊干に都て漏泄され、挙止は半文錢に直らず。

《訳》

双潤・五峯の一带に神出鬼没し、瘋癲三昧をやらかす。これこれ、いかんせん豊干に文殊普賢であることをすつかりもらされてしまつては(寒山拾得の姿で再来しても)、こんなふるまいは何の価値もありはしまい。

《注》

○磎＝「広韻」去声諫韻「潤」に「亦作磎」とある。

○咄＝「禪学」九五五頁に「叱と同じで、人を呵り罵る時に発する語」とある。

○不直半文錢＝「禪学」三七九頁「再来不直半文錢」に「同じ事をふたたびすれば何の価値もない」とある。

同一画題「寒拾」の傍線③④は同じ内容であり「掣風顛」を「徹風徹顛」と言い換える。「掣」を「徹」で解釈すべきことが「宋語」の例文よりも明白である。作者無象静照(一一三四～一三〇六)は、入宋が十年あまりに及び、南宋に相当する時期の用例とみなせると思う。

二、「徹肘」

「徹肘」は、辞書類では唯一「禪学」八八四頁に「中途半端のこと。「拱手仰成、愼無徹肘」「禪苑清規七、尊宿住持」とあるが、「掣肘」と解すべきことを確認する。「禪苑清規」は鏡島元隆他「訳註禪苑清規」(曹洞宗宗務庁、

一九七二、以下『訳註』の校訂文を用いる。『訳註』五〇一頁によれば、『禪苑清規』は序文執筆時の刊行ならば、崇寧二年（一一〇三）刊となる。嘉泰二年（一二〇二）には『重雕補註禪苑清規』の名で刻される。高麗版を除き現存の版本写本はすべて『重雕補註禪苑清規』にもとづく。唯一高麗版が宝祐二年（一二五四）重刻本の覆刻であって、その底本は聖和元年（一一一一）の版本に溯れる。

尚、諸本の異同は『訳註』二五七〜九頁と蘇軍点校『禪苑清規』（中州古籍出版社、二〇〇一、以下『蘇軍』）九四頁に拠る。訓読には『訳註』・『禪語録傍訳全書』第五卷『禪苑清規』Ⅲ（四季社、二〇〇七、以下『傍訳』）九一〜五頁・『敕修百丈清規左觴』（中文出版社、一九七七、以下『左觴』）三四九頁がある。訳には『傍訳』・Yifa. The Origins of Buddhist Monastic Codes in China: An Annotated Translation and Study of the Chan Yuan qinggui. Honolulu: University of Hawaii Press, 2002（以下『Yifa』）二一六・七頁があり、注は『訳註』『傍訳』『Yifa』が付す。

【徹肘】

『禪苑清規』卷七「尊宿住持」

- | | |
|-----------------|------------|
| 代佛揚化、表異知事、故云傳法、 | 故宜運大心、演大法、 |
| 各處一方、續佛惠命、斯曰住持。 | 蘊大德、興大行、 |
| 初轉法輪、命爲出世、 | 廓大慈悲、作大佛事、 |
| 師承有據、乃號傳燈。 | 成大利益、 |
| 得善現尊者長老之名、 | 權衡在手、縱奪臨時、 |
| 居金粟如來方丈之地。 | 規矩準繩、故難擬議。 |
| 私稱洒掃、貴徒嚴淨道場、 | 然其大體、 |
| 官請焚修、蓋爲祝延聖壽。 | 令行禁止、必在威嚴、 |

形直影端、莫如尊重。

整肅叢林規矩、撫循龍象高僧、

量才補職、略爲指蹤、

朝晡不倦指南、便是人天眼目。

拱手仰成、慎無微肘。

*○は平声・●は仄声

《訓読》

仏に代つて化を揚げ異を表し事を知すれば、故に伝法と云い、各おの一方に処し仏の恵命を続けば、斯に住持と曰う。初めて法輪を転ずれば、命じて出世と爲し、師承に授有れば、乃ち伝灯と号す。善現尊者の長老の名を得、金粟如来の方丈の地に居す。私に洒掃と称し、道場を厳浄せんと貴徒し、官、焚修を請うは聖寿を祝延せんが蓋爲なり。故に宜しく大心を運らし大法を演べ、大徳を藎み大行を興し、大慈悲を廓げ大仏事を作し大利益を成すべし。権衡手に在つて縦奪時に臨むも、規矩準繩故より擬議し難し。然れども其の大体は、令行禁止は必ず威嚴に在つて、形直影端は尊重に如くは莫し。才を量り職に補し、略ほ指蹤を爲し、手を扶いて成るを仰ぎ、慎んで微肘すること無かれ。叢林の規矩を整肅し龍象高僧を撫循し、朝晡倦まずに指南するは便ち是れ人天の眼目なり。

《訳》

仏に代つて教化し、優れた才能を発揮し事務を担うので、伝法と言われ、各おの一所に居り、仏の知恵を受け継ぐので、住持と言われる。初めて説法を行うから、出世と名づけられ、師子相承に根拠があるから、伝灯と号される。(住持は)須菩提の敬称である長老の名であれば、維摩居士の居室にちなむ方丈に住している。私に洒掃と称し、道場を清浄に保とうとし、官から焼香仏事を請われ、皇帝陛下の永寿を祈願する。だから(住持は)大いに心を配つて仏法を講じ、徳を積んで行動にうつすのがよいし、また大いに慈悲を施し仏事を行い利益を及ぼすのがよい。権限は手中に在るのだから、把住放行も自由自在であるが、規矩準繩についてもとより論ずるのは

容易ではない。しかしその要点は以下のとおり。規則を遵守させるには威厳を保つことが絶対で、景仰心服させるには尊重されることが第一である。適材を適所に配置しおよそのところを指示し、後はただ成果があがるのを待ち、決して干渉してはならない。叢林の規矩を整備し衆僧高僧を手懐け、終日怠らずに教導するのが、すぐれた指導者なのである。

〔注〕

○表異知事＝「左觸」は「知事に異なることを表す」・「訳註」他「知事に表異す」と訓読。「傍訳」は「知事とは異なる」・「Yifa」は「住持は知事に手本を示す」(he sets an example for the administrators)と訳す。いずれも「知事」を職位とする。しかし「碧巖録」一則本則評唱に「傳法得人」とあり、ふさわしい人物を得て、はじめて法が伝えられる。また「輔教編」中、広原教(大正五二、六五八b)に「住持也者、謂藉人持其法、使之永住而不泯也。夫戒定慧者持法之具也。僧園物務者持法之資也。……資與具待其人而後舉。善其具不善其資不可也。善其資而不善其具不可也。皆善則可以持而住之也」(住持なる者は、人に藉つて其の法を持し、之をして永く住して泯ばざらしむるを謂う。夫れ戒定慧は、法を持するの具なり。僧園物務は、法を持するの資なり。……資と具は其の人を待つて後に挙ぐ。其の具を善くして其の資を善くせざるは不可なり。其の資を善くして其の具を善くせざるも不可なり。皆善ければ則ち以て持して之を住す可し)とあり、住持は教学・実務に卓越した能力が必要であった。そこから「代佛揚化」と「表異知事」は句の構造が同じで、教学・実務を指すと考える。

○住持＝『禪の思想辞典』(東京書籍、二〇〇八)一五七頁「住持」に「世にとどまって仏法を守ること。『禪苑清規』には「故に云く、法を伝えて、各おの一方に処いて仏の慧命を續ぐ、斯れを住持と曰う」……後に一寺を主管する役職(住持職)をさすようになった。『敕修百丈清規』住持章によれば、淵源は百丈懷海が一寺の大衆(修行僧)を指導する僧を住持と呼称したことによるといふ」とその変遷を簡潔に記す。

- 善現尊者 須菩提、仏十大弟子の一人、解空第一。『大唐西域記』卷四「蘇部底」（大正五一、八九三b）参照。
- 長老 景徳伝灯録』卷六、禪門規式（禪文化研究所本）一〇一頁に「凡具道眼有可尊之徳者、號曰長老。如西域道高臘長呼須菩提等之謂也」（凡そ道眼どうがんを具して尊ぶ可きの徳有る者、号して長老と曰う。西域に道高く臘長く須菩提等と呼ぶの謂いの如し）とある。
- 金粟如來 維摩居士の前身。『碧巖録』八四則頌評唱参照。
- 方丈 住持の居室。維摩居士の居室に由来。『祖庭事苑』卷六「方丈」（統藏一一三、一七七a）参照。
- 貴徒 』「訳註」他「貴かうらくは徒ただ」と訓読。「貴徒」は「貴圖」に同じ。『祖庭事苑』卷二「徒什麼」（統藏一一三、一五b）に「徒、當作圖、謀也」とある。『訳註』によると、大東急記念文庫本（五山版）は「貴圖」に作る。『中古虚詞語法例釈』（吉林教育出版社、一九九四）三八六頁「圖 圖欲……」に「〈圖〉作爲動詞、有〈圖謀〉（計議）義、而圖謀・計議往往爲達到某種目的・實現某種愿望、故引申之、則作爲能愿動詞、表示主觀上的打算或希望。比較常見的是〈圖欲〉連用、乃同義并列複詞」とある。また『助字辨略』卷四（中文出版社、一九八三）一九二頁「貴」に「貴猶欲也」とある。「貴徒」 』「貴圖」 』「貴欲」 』「欲」に集約される。
- 梵修 』「禪学」一一〇二頁に「香を焚いて仏を瞻礼すること」。「蘇軍」は意を以って「梵修」に改める。『訳註』によれば、諸本に異同はない。
- 蓋爲 』太田辰夫『中国語史通考』普及版（白帝社、一九九九）二〇五頁に「因爲」は〈因〉と〈爲〉の同義複合語であるが、『相堂集』では〈爲〉のみを用いる。また〈蓋爲〉〈只爲〉ともする」とある。「蓋爲」は「貴徒」と隔対で「爲」に集約される。
- 大徳 』「傍訳」は「高德の僧」とする。「運大心……成大利益」の各句に「大」の一字が挿まれていると考える。
- 權衡在手、縱奪臨時 』『碧巖録』九則垂示「鑊錙在手、殺活臨時」に同じ。師家のはたらしは名劍鑊錙ばくぞうを手に

して、相手を生かすも殺すも自由自在。「權衡在手」は『禪學』二八一頁に「權ははかりのおもみ。衡ははかりの竿。二つともに手の中にあればものの軽重をはかること自在」とある。「縱奪」は『禪語』二二〇頁に「修行者を導く両様的手段。「放行把定」に同じ」とある。

○令行禁止 法令が嚴格に執行されること。『管子』立政「令則行、禁則止」に拠る。

○規矩準繩 基準となる法度や法則。規はコンパス。矩はさしがね。準は水準器。繩は墨繩。拠は『孟子』離婁章句上。

○擬議 思いはかる。『碧巖錄』五則本則評唱「不容擬議」の「種電鈔」に「非識情所測也」とある。

○形直影端 〔禪語〕一〇二頁に「形がまっすぐであれば影も端正である」とあり、『Yia』は「外見は君子のそれかもしれない」(His outward image may be that of a righteous man...)と訳すが、『定本禪林句集索引』(禪文化研究所、一九九一)四一頁「謂内心直也」を採る。

○指蹤 指示し操る。『史記』卷五三、蕭相国世家「發蹤指示」に拠る。

○拱手仰成 手を拱こまいて成果を待つ。拠は『書経』畢命「垂拱仰成」。

○愼無 決してくするな。『中国語史通考』七一頁参照。

○龍象 衆僧の美称。『左鱗』一九九頁「龍象筵開」条参照。

○朝晡 終日。朝は辰刻、晡は申刻。『訳註』は大東急記念文庫本等により「朝輔」に改めるが、従わない。

○人天眼目 〔禪語〕三六四頁に「すぐれた導き手」とある。

「略爲指蹤」と「愼無徹肘」は隔対で「愼無」が禁止表現だから、「大体のところを指示する」「いらざる介入をするな」とほぼ同義に解すべきで「徹肘」 〔掣肘〕となる。これは現代中国語では「掣」と「徹」が同音なので自明のようだが、『訳註』によれば、諸本はすべて「徹肘」に作る。すでに『宋語』が「掣」「徹」の通用を示すが、「徹

肘」の用例とあわせて考えると「掣」「徹」は宋僧による互用の可能性がある。

三、「掣風掣顛」旧解

鎌倉時代の無象は「掣」「徹」の通用を理解していたが、室町時代にはわからなくなっている。笑隱大訥(一二八四〜一三四四)『蒲室集』の注釈書『蒲孽』に¹⁵⁾

村云、掣字、亦与顛齊耶。韻書、掣、挽也。又蕭云、¹⁶⁾村云、掣、挽也。被風疾挽也。幻謂、掣字、醫方大成等、中風腰膝疾痛引之類乎。……掣ノ字ハ、ヒクト云字ナレハ、¹⁷⁾蕭菴ハ、風ニヒカル、ト云心ニ云ソ。¹⁸⁾舟ノ云、此義モ如何。必竟ハテウジナレハ、掣ノ字ニ、理ハ難着也。

とある。

これは『蒲室集』巻一(中文出版社、一九八五)二〇二九頁「玉藍田住棲賢寺杭諸山疏」の「笑長汀子掣風顛」の注釈である。月舟寿桂(舟)は傍線⑦で、希世靈彦(村)の傍線⑤の解釈も正宗龍統(蕭菴)の傍線⑥の解釈も同じ事だから、「掣」の字義に結着がつけられないと述べる。私見では「掣」「徹」が宋僧により互用されたのだから、無象が入宋した南宋期には「掣」は「徹」に通ずと理解できたが、後の留学僧には全くわからなくなってしまった。そのことが『蒲孽』にも反映されていると推測する。

また江戸時代の無著道忠(一六五三〜一七四五)『臨濟慧照禪師語録疏論』(『臨濟録抄書集成』一三六三頁「掣風掣顛」の条に

忠曰「¹⁹⁾風狂如小兒風驚疾也」。○正字通卯中「四十九文」曰「掣、說文掣引縱曰擣。瘵省聲。瘵小兒瘵癡病。六書故曰、瘵癡本謂小兒風驚、乍掣乍縱。掣擣也。縱則掣而乍舒也。瘵癡因掣縱立文」(忠曰く「風狂、小兒の風

驚の疾の如し。『正字通』卯の中「四十九丈」に曰く「掣は『説文』に（擗は引縦を擗と曰う。癩の省声なり）。〈癩は小兒癩癧の病なり〉。『六書故』に曰く〈癩癧は本と小兒の風驚を謂い、乍ち掣キチき乍ち縦ハナつ。掣は搯キチくなり。縦は則ち掣キチいて乍ち舒ノボすなり。癩癧は縦に困トつて文を立つく〉。とある。

無著は傍線⑧と解釈するが、根拠とする『正字通』が『説文解字』『擗』『癩』条を引き、『六書故』を引用するのは、『掣搯也』と字義が明示されているからであろう。「掣」と「擗」とを関連づけるのは行き過ぎではなからうか。

さらに鳳州宗眼（?）一八〇九）『諸録俗語解補』は「掣」の字義を白話に求める。芳澤勝弘編注『諸録俗語解』（禪文化研究所、一九九九）二五〇頁「掣風掣顛」条に

大藏院本『俗語解補』卷之下、二十丁表…「掣電」「掣目」の掣なり。『俗本水滸傳』第一回、龍虎山白蛇但見の文に「昂頭驚颯起、掣目電光生（頭を昂ぐれば驚颯起こり、目を掣すれば電光生ず）」。目をひらめかし使う氣味なれば、掣は「つかう」と譯すべし。正本『水滸傳』二十三回、西門慶が語に「你看、這風婆子、只要扯著風臉取笑（你看よ、這の風婆子、只だ風臉キチを扯キチ著して笑を取らんと要す）」とある。

要するに鎌倉以後「掣」の字義が不明だったが、『宋語』により字義が明確となった。しかし『中公』はじめ注釈書類に『宋語』に依拠して「掣」は「徹」に通ずと記すものは見つからない。また市木武雄編『五山文学用語辞典』（統群書類従完成会、二〇〇二）一一二〇頁「掣風掣顛」に「精神の異常な行動（風顛）を引き止める」と新釈を掲げ、文意が通るとは思えない。

四、『臨濟録』勘弁「本条」

私見では「徹風徹顛」と記されるはずが、宋僧による「掣」「徹」の互用によって『景德伝灯録』『天聖広灯録』に「掣風掣顛」と録され、現行の『臨濟録』にも受けつがれたと推測する。また河陽・木塔長老は「本条」の話の他には知られない人物でもある。よって「本条」は宋代に大幅に改変されたと見られ、宋僧の理解により解釈すべきと考へる。

笑翁妙堪に普化の記載に対する頌古がある。

『禅宗頌古聯珠通集』卷二〇（統藏一一五、二五一b）²⁰

擺鐸搖鈴恣賣乖、大悲院裏趕村齋。河陽木塔休穿鑿、[㊦]是甚堂前破草鞋。

《訓読》

鐸を擺い鈴を搖し恣ままに売乖し、大悲院裏に村齋に趕う。河陽木塔穿鑿すること休かれ。是れ甚の堂前の破草鞋。

《訳》

普化はこれみよがしに鈴鐸を振り鳴らし（「明頭に来れば、明頭に打し、暗頭に来れば、暗頭に打す……」と街で唱える。臨濟が侍者をやって「そのどれでもなく来たら、どうするんだ」と問わせると）「明日は大悲院で村のお齋がある」と言う（侍者の報告を受け、臨濟は「以前から普化はただ者でないと思っていた」と述べる）。でも河陽・木塔長老は「穿鑿」すなわちこじつけて解釈してはいけないよ。普化はなんと役立たずの僧堂前の切れ草鞋なのだから。

《注》

○擺鐸く村齋 〓『臨濟録』勘弁「普化振鈴」の話頭。「因普化常於街市搖鈴云（明頭來明頭打、暗頭來暗頭打、四方八面來施風打、虚空來連架打）。師令侍者去、纔見如是道、便把住云（總不與麼來時如何）。普化托開云（來日大悲院裏有齋）。侍者回、舉似師。師云（我從來疑著這漢）。『文庫』一五七く八頁參照。

○賣乖 〓『中国語大辭典』（角川書店、一九九四）二〇三九頁に「利発さをひけらかす」とある。

○趕 〓『中日辭典』第二版（小学館、二〇〇三）四七二頁「趕」の「ある事態や時期に」出あう」を採る。

○甚 〓『禪語』二三四頁に「なんとという……なんとくだらぬ。感嘆詞」とある。

傍線⑨は、以下の例が参考になる。

『永平元禪師語録』（『道元禪師全集』一三卷、春秋社、二〇〇〇）一三四く五頁

上堂。佛佛授手、祖祖相傳、相傳箇什麼、授手箇什麼。大衆要知落處麼。三世諸佛六代祖師、當甚破草鞋破木杓。

⑩若也擬議、永平在你脚底。

《訓読》

上堂。仏仏授手し、祖祖相伝す、箇什麼をか相伝し、箇什麼をか授手す。大衆落處を知らんと要すや。三世諸佛六代祖師、甚の破草鞋破木杓にか当らん。若也し擬議せば、永平は你的脚底に在らん。

《訳》

上堂。仏から仏へ授け祖師から祖師へ伝えたが、一体何を伝え何を授けたのか。おまえたちその深意を知りたいか。三世の諸仏も六代の祖師も切れ草鞋や壊れた柄杓にさえも値しない。もしあれこれと躊躇するのなら、私（道元）はおまえたちの足下にいるであろう。

* 訓読・訳は私に行った。

《注》

○當甚Ⅱ『詩詞曲語辭匯釈』（中華書局、一九五三）四九六頁に「算甚」とある。

伝えたのは仏法で、諸仏祖師に求めれば、切れ草鞋などのように役に立ちさえしない。だから己自身の問題となる。傍線⑩はほぼ同じものが『碧巖録』四五則、圓悟克勤の本則評唱にあり、遡れば『趙州録』の例に行き着く。以下に小川前掲『統・語録』一六九頁の解釈を抜書する。

趙州は……「脚底」の語を刺激的に用いることで、自己「脚跟下」の事にハッと気づかせようとしているのであろう。圓悟はこの問答を典拠とすることで……「躊躇」してわずかも思慮・言句に渉るなら、汝はたちまち「老僧在你脚跟下」というかの話頭の僧のごとく、自己の立脚点を失わざるを得ぬであろう。

やはり自己の「脚底」に目を向けさせている。さらに圓悟の本則評唱の続きには

……這箇公案、雖難見、却易會、雖易會、却難見。難則銀山鐵壁、易則直下惺惺、無你計較是非處。此話與⑩普化道來日大悲院裏有齋話、更無兩般。

とある。これも『統・語録』一七一頁に

容易といえは至極容易、困難といえは徹底して困難……「銀山鐵壁」のごとくに人をよせつけぬ難解さ、だが解釈せずに一語まるごとをそのまま受け容れるなら「直下惺惺」その場でただちに明々白々である……そこには是非を云々する余地は無い。普化の話……もこれと同じことなのである、と。七斤布衫の話も普化の話も、「語句上に辨」じて「是非を計較」すれば取りつくシマもない難解さ、しかし、理窟ぬきで「一撃便行」すれば「直下に辨」なのだ、圓悟はそう説いている。

とある。

もちろん言及されるのは傍線⑩の「普化振鈴」の話頭であるが、普化を穿鑿する点で「本条」とも通ずる。是非

を云々する言葉についてまわると、自己の立脚点を喪失する。「本条」も同様に解釈できる。

ところで小川隆『臨濟録』一禪の語録のことばと思想」（岩波書店、二〇〇八）一九三・四頁で「風顛」に関連する表現に言及する。

『景德伝灯録』が普化の言行を「狂を伴う」とか「風狂」の如き接化などと説明しているのは、いかにも宋代士大夫社会の書物らしい、上からの教化という意識を表した用語のように思われる。……『祖堂集』卷一五・盤山章はこう記している。「……向後、別処に去きて風顛を打し去也」……このちお前は他所へいって、瘋癲をやつてゆくことになるだろう、と。これなら素直にうなずける。

「掣風掣顛」は「徹風顛」に集約できるから「上からの教化という意識を表した用語」とみなせ、しかも「風顛に徹す」の訓読から推せるならば「強い決意をもって風顛を続ける」の意となり、「伴狂」と同じ意味になる。さらに山田史生氏によれば、「本条」では長老は普化を異常と評価し「是れ凡か是れ聖か」と白々しく穿鑿していることになるが、はからずも同時に「普化は〈掣風掣顛〉即ち〈伴狂〉（狂人のふりを）している」と矛盾した発言をさせられていることにもなり、その愚かさが際だつ可能性があるように思う。

また「本条」は普化の登場で困炉裏端会議から急展開し、即時性が強調される。しかも長老が提示した穿鑿すなわち「是凡是聖」の選択疑問もこの一段に三度繰り返され、無意味であることが示される。最後に「本条」は、肝胆相い照らす臨濟と普化の間髪入れぬやりとりを以て一気呵成に締め括られるが、二人の長老がそのやりとりを全く理解できず、あつけにとられてにちがいないと、我々読者に想像させないではおかない。

かかる推測が正しい時、「本条」は長老に対して普化を穿鑿すること自体が誤りであつて、丸のままとらえるべきことを強調していることになる。結果「本条」には、通常敬意をこめて「長老」と呼ぶべき二人の長老を見下げる姿勢が通徹する。それは当然「上からの教化」に他ならない。

おわりに

本稿は「掣風掣顛」の穿鑿に徹してしまつたが、『宋語言詞典』の成果に次の三点を付加できた。第一に『臨濟録』のような禅籍でも、時代が下る日本の語録に解釈に資する用例が求められる。鎌倉時代の無象静照が同一画題の賛文中で同じ内容を述べるのに「掣」と「徹」を通用させており、その通用を示すのに最適な用例と思う。第二に「禅苑清規」「徹肘」の例を挙げ、宋僧の間で「掣」と「徹」が互用されている可能性を示した。ただ問題は他に用例が確認されないことである。第三に『臨濟録』の「掣風掣顛」は「風に掣し顛に掣す」と訓読すべきだが、日本の語録中では多くの場合「掣」「徹」の通用が知られておらず、旧解により解釈すべきである。

最後に「本条」を解釈した。小川隆氏が指摘する「風顛」関連の表現に注目すると、「掣風掣顛」は「佯狂」に通じる可能性がある。また宋僧特有と想定される「掣」「徹」の互用に着目すると「本条」はかなりの改変が加えられ、宋代の禅を表す一段に変容してしまつている。そしてそれは「上からの教化」を強く押し出したものに他ならない。

註

(1) 沖本克己『禅思想形成史の研究』(花園大学国際禅学研究所、一九九八)三五頁に「風狂、瘋癲は普化の形容詞」とある。ただし小林圓照「禅卜リックスターとしての普化―比較禅学への一試

論」(『比較思想研究』六号、一九七九)七五頁によると『臨濟録』では臨濟がシテ役、普化がワキ役即ちトリックスターに造りあげられており、本来の普化の姿はずでに歪曲されてしまつている。(2) 同論文一頁に『臨濟録』のほうは『景德伝灯録』

(一〇〇四)にも後れる『天聖広灯録』(一〇三六)にその原型が認められ、しかもそれはすでに臨済以後の大幅な改変の手を経たもの」とある。

(3) 衣川賢次「祖堂集の校理」(『東洋文化』八三、二〇〇三)一四〇～八頁によれば「祖堂集」の成立過程は①南唐保大一〇年(九五二)に一卷本が成立、②その後約五〇年の間に増広され、一〇巻本となり、③高麗で若干の増補を加え、二〇巻本に再編し、高宗三二年(一二四五)刊となる。臨済普化の記載は②の増広と考えられ、一〇世紀成立と見なせる。

(4) 私見では「掣風掣顛」は本来「徹風徹顛」と記すべきもので、「徹」の代わりに「掣」が使用されたのは「因音近而誤」と考える。「因音近而誤」は衣川賢次「禪籍の校讐学」(田中良昭博士古稀記念論集『禪学研究の諸相』大東出版社、二〇〇三)で分類提示する「祖庭事苑」の校讐の一つでもある。確かに方言による音通の可能性もあるが、その用例が「掣」ではなく「徹」と記録された如浄・橘洲の出身は越州(浙江省・嘉定府龍遊県(四川省)であり、方言によるものとは断定しがたいであろう。ただ語録は筆録者の問題等も絡み、簡単には結論できない。また「掣風掣顛」の

語は『臨済録』等を典拠に広く使用され、それとともに「掣」と「風顛」「風狂」も搭配として固まり広まっていったと推測する。

(5) 同書「はじめに」に「唐代禪の基調は……一「即心是仏」、二「作用即性」、三「平常無事」の三点に要約できる。……自己の心が仏なのであるから、自身の営為はすべてそのまま仏作仏行にほかならず……ただ「平常」「無事」でいるのがよい、……宋代の禪は……禪の制度化の時代である。……修行の面についてのみ言えば、宋代の禪は「公案禪」……先人の問答の記録「公案」、それを課題として参究することが修行の中心……その方法は……二つ……「文字禪」は公案の批評や再解釈を通して禅理を闡明しようとするもので、……「看話禪」は、特定の一つの公案……に全身全霊を集中させ、その限界点で心の激発・大破をおこして劇的な開悟の体験を得させようとする方法」とある。

(6) 佐々木ルース訳・トーマス・カーシュナー編『臨済録』(Sasaki, Ruth Fuller, trans. and commentator, and Kirchner, Thomas Yūko, ed., *The Record of Linji*. Honolulu: University of Hawaii Press, 2008)二九四頁は反語の「知他」を詳説した後、

- 「ひよっとすると作者不詳『開河記』の用例（蕭后謂曰、知他是甚圖畫）(Empress Xiaosaid, Who knows what kind of painting it is)」[蕭后は言った（どんな絵か誰に分かりましようか（いや、誰にも分かりませぬ））]は（知他是凡聖）より早い例外かもしれない」と記す。しかし『開河記』（魯迅校録『唐宋傳奇集』魯迅全集出版社、一九二七）二一四頁には「因觀殿壁上有廣陵圖、帝瞪目視之、移時不能舉歩。時蕭后在側、謂帝曰（知他是甚圖畫、何消皇帝如此掛意）」とある。広陵図に釘付けの帝に、側に居た蕭后が申し上げた。「それが何の絵なのかわかりませんが、陛下はこんなにも執心なさってはなりませんわ」。結局、反語の「知他」は宋以前に存在せず「ひよっとすると〜は例外かもしれない」(except possibly...) 以下も不要となる。
- (7) Watson, Burton, trans. *The Zen Teachings of Master Lin-Chi: A Translation of the Lin-Chi Lu*. Boston: Shambhala Dragon Editions, 1993.
- (8) 「知他〜?」が反語の辞として固まる……のは……宋代……それまで……は《知》のあとの資語が疑問句（……選択疑問）をなしているところ、むしろ文の機能があり、そのときの《他》は
- 主述連語の主語と認められる」とある。
- (9) 駒澤大学図書館蔵「大光明藏」（五山版）上巻、八〇葉も同じ。
- (10) 国立国会図書館蔵、嘉慶二年（一三八八）刊『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻二、六葉も同じ。
- (11) 駒澤大学図書館蔵、慶長九年（一六〇四）刊『仏祖宗派図』五一葉「靈隱「大川」普濟」の下に「雪竇「石門」來」とある。ただ前掲『大日本仏教全書』一四三、三三頁「石門來」に「考」來下一本注有宋人嗣笑翁堪」とあり、別本では笑翁妙堪（一一七七〜一二四八）の法嗣とする。
- (12) 玉村竹二著『五山禪僧伝記集成』（新装版）（思文閣出版、二〇〇三）無象靜照の条参照。
- (13) 『禪林象器箋』（中文出版社、一九七九）二四二・三頁・『禪林象器箋抄釈』（禪文化研究所、一九九三）七四頁もある。
- (14) 「Yital」は「他人の臂を押しつける」(to jostle the elbows of others) と訳し、三〇六頁、注六二に「威圧的な干渉」(overbearing interference) の意とする。『蘇軍』校記に「掣」、底本・金本作「徹」、據文意改」とある。『左觸』は「徹肘」に作る。『訳註』他「徹肘」のまま訓読する。
- (15) 本文の引用は、飯塚大展『蒲室疏抄』研究序説

- (三) 史料篇 (三三) 京都府立総合資料館所蔵『蒲華』
 (其三三) 『駒沢大学仏教学部紀要』六九、二〇一—
 五八頁による。また同『蒲室集抄』について—
 『蒲根』『蒲華』を中心として、『禅学研究』
 七一、一九九三—一七頁によると、注釈は講義に
 よって継承された。その順番は希世靈彦(村・村
 菴(一四〇三〜八八) ↓正宗龍統(蕭・蕭菴(二四
 二八〜九八) ↓月舟寿桂(舟・幻雲(一四七〇
 一五三三) となる。
- (16) 『諸録俗語解補』については「諸録俗語解」とその
 撰者について(前掲『諸録俗語解』解説) 参照。
 用例に「本条」と『東海一漚集』卷二(『五山文
 学全集』二卷、思文閣出版、一九九一) 九二七頁
 「蒋山萬壽請無隱和尚住海藏寺疏」「人言老師只管
 掣風掣顛、我道兒輩那知是凡是聖」を挙げる。野
 澤勝夫「市木武雄先生編『五山文学用語辞典』に
 ついて」(『昭和学院国語国文』三六、二〇〇三)
 七頁は「五山文学研究の礎となる貴重な労作」と
 総評する。「特集五山文学」(『文学』一二卷五号、
 岩波書店、二〇一〇) は同辞典に触れない。黙し
 て蔽に評価したのかもしれないが、『文学』は一
 般読者も対象とし、五山文学への導きの役割も
 担っているはずである。
- (18) 柳田聖山『臨濟録』(『仏典講座』三〇、大蔵出版、
 一九七二) 二〇〇頁に「この二人の伝記は明らか
 でない。『伝灯録』および『宗門統要統集』六の
 普化の章にこの話を載せているのみ」とある。
- (19) 沖本前掲『禅思想形成史の研究』三八九頁、注
 二〇は「本条」と『祖堂集』卷一七、普化章「又
 林際与師看聖僧次、林際云是凡是聖、師云是聖。
 林際便喝咄、師便撫掌大咲」とが部分対応すると
 見る。もちろん「本条」の来源が「祖堂集」とは
 限らないが、『景德伝灯録』の異同から、その蓋
 然性は高いと考える。西口芳男「東禅寺版『景德
 伝灯録』解題」(『景德伝灯録』禅文化研究所本)
 一〇頁によると、『景德伝灯録』は①四部本(南
 宋初期本他)／②四部叢刊(三篇子部)・延祐本
 (二二二六年／大正藏底本) ③東禅寺版(一〇八〇
 年)・明本(大正藏の対校本)の二系統に分けら
 れる。また同六頁に「(四部本)加藤補」は五種
 の混合版であるが……卷一〇〜卷一二は南宋初期
 の刊本とされ、……かえって古版に近い内容を示
 す」とある。そして同附録一〇頁が明示するよう
 に、東禅寺版は「本条」とほぼ一致するが、四部
 本(卷一〇、一三葉)には「一日入臨濟院。臨濟
 日賊賊、師亦日賊賊。同入僧堂。臨濟指聖僧問是

凡是聖。師曰是聖。臨濟曰、作遮箇語話。師乃撼鐸唱曰、河陽新婦子、木塔老婆禪。臨濟小厮兒、只具一隻眼」とある。また『從容錄』(一一二四四年)卷二、第二則、巖頭拜喝(大正四八、二四一b)にも「昔日普化曾指聖僧問臨濟、且道、這箇是凡是聖。濟便喝。化云、河陽新婦子、木塔老婆禪。臨濟小厮兒、却具一隻眼。濟云這老賊。化出僧堂云賊賊」とある。これより「本条」から「長老」に関する部分と「掣風掣顛」を除けば、『從容錄』や四部本の記載に近づき、『祖堂集』にまで遡れると思ふ。

(20) 『日本宮内庁書陵部藏宋元版漢籍影印叢書』(綫装書局、二〇〇一)所収元刻本は未見。

(21) 原文は以下の通り。『続・語録』に引用される。

『碧巖錄』四五則本則評唱「若向一擊便行處會去、天下老和尚鼻孔一時穿却、不奈你何、自然水到渠成。苟或躊躇、老僧在你脚跟下。佛法省要處、言不在多、語不在繁……」。

『趙州錄』「問(如何是毘盧向上事)。師云(老僧在你脚底)。云(和尚爲什麼在學人脚底)。師云(你元來不知有向上事)」。

(22) 但し「一夜碧巖」すなわち『仏果碧巖破関擊節』(永平正法眼藏蒐書大成別卷『道元禪師真蹟關係

資料集』大修館書店、一九八〇)八五五頁には、下線①は「普化大慈般若牀話」とある。同一〇二四・五頁によれば「一夜碧巖」は道元が帰朝に際し、神人の助筆で一夜で書写したとされる。現行の『碧巖錄』は大徳四年(一一三〇〇)の張明遠版にもとづくから、「一夜碧巖」は現存の最も古いものとなる。

(23) 『類語例解辞典(新装版)』(小学館、二〇〇三)一〇二八頁に「徹する」「終始する」は、ともに「…に」の形をとり、最後まで同じ姿勢、状態が続く意味においては共通であるが、「徹する」の方は、「人道主義に徹する」のように、行為者その行為を行うことに対して強い決意をもっているのに対し、「終始する」の方は、特に行為者の意志は問題とならず、単に同じ状況が続く意である」とある。現代中国語の辞書の用例には「徹底堅持人道主義」(人道主義に徹する)、『岩波日中辞典』(一九八三、七五六頁)とあって、「堅持到底」(とことんまでやり通す)のように、強い決意と貫き継続する程度とは分けて表現されるように、「徹」には訓読の「徹す」ほどには強い決意が含まれないと思われる。

(24) 『臨濟錄』管窺(二)、『弘前大学教育学部紀要』

八五、二〇〇一）一四頁に「掣風掣顛」という云い草は、あらかじめ自分は正常であり普化は異常であると看做した上での形容である……今更「是れ凡か是れ聖か」と問うことは白々しい」とある。

(25) 後半に「便」の字が三回使用される。ただ沖本克己「禅宗の教団(六)」(『禅文化』一六一、禅文化研究所、一九九六)五六頁に「禅問答では……目前にある事物を挙揚するのを常套とする面がある。時空という系列的概念を分別として避けるには即時性しかないからである」とある。確かに即時性は「本条」に特異ではないが、その展開は個別的で「本条」の即時性にも個別の意図がある。別分野から「本条」の展開をなぞらえてみる。平原祐二「体育の授業(サッカー)における「状況判断」を評価する」(広島県立総合技術高等学校『研究紀要』五号、二〇〇九「四号以後、<http://www.sougou-thiroshima-c.ed.jp/>上のみ)一二頁に「ボールを奪ったら相手が整わないうちに攻める……カウンターを成功させるためには、FWは味方がボールを……奪った瞬間にカウンターのアクションを起こさなくてはならない。ボールを奪った人は、奪ったことで休まないで、相手が

……(ボールを失い攻撃から守備に切り替わった瞬間)にボールを前に出さなければならない。しかし……味方が守備をしている時にFWはただ見ているか、DFはボールを奪っても簡単にボールを下げてしまい、相手に戻る時間を与えている事が多い」とある。ミスを犯した相手の守備の整わない(＝いらざる穿鑿で端を発いてしまった長老が、困炉裏端会議の雰囲気から抜け出せない)内に、直ちにボールを出し(＝臨済から普化に発問し)て、速攻(＝臨済と普化とが間髪入れぬ応酬)をするのが、カウンターを成功させる絶好の機会だが、一度もたついたり躊躇してしまえば、もはやそこにはチャンスはない。

(26) 宋僧は普化を知る者は臨済のみで、臨済あつてこそ普化は力量が発揮できると述べる。『大光明蔵』巻中(統蔵一三七、八五四a)普化条の橘洲宝曇の評語に「寶曇曰(此老在先師會裏時已有此様、始終入過量境界。世人烏得而知之、唯臨濟知之。如雲龍相從、風虎相依……)」「此の老先師の會裏に在る時、已に此の様有り。始終過量の境界に入る。世人烏んぞ得て之を知らんや。唯だ臨濟のみ之を知る。雲龍相い従い、風虎相い依るが如し」とある。また『禅宗頌古聯珠通集』卷二〇(統蔵

一一五、二五三a)「本条」に対する海印超信の頌古に「騏驥驚駘辨者稀、淺深毛色混同之。若無伯樂垂精鑒、千里追風不易騎」(騏驥と驚駘と辨ずる者稀にして、淺深の毛色も之を混同す。若し伯樂の精鑒を垂れる無くんば、千里の追風も騎し易からず)とある。ここでは山田前掲『臨濟録』管窺(二)一一頁の解釈を掲げる。「普化という良驥は臨濟という伯樂の一顧を得ることに依って初めて奔馳して千里を致す」。

(27)

「本条」については、里道徳雄『臨濟録 禪の真髓』(NHKライブラリー、一九九五)三一・三二頁に「臨濟和尚が普化を勘弁しようとした、ところが普化が逆にその場にやって来て、臨濟和尚ほか河陽、木塔の三人の長老まで片っぱしから勘弁し付度してゆうゆうと去っていった話」とあり、『中公』四〇頁にも「河陽・木塔の二長老と臨濟を、普化が軽くあしらって、値ぶみする一段」とある。しかし宋僧の解釈を用い、長老に着目して理解すべきと考える。